

これからを築くのは



圭介は晩年、現在の神奈川県小田原市国府津に「瀧の家」と言われる別荘を建てます。そこには「江戸幕府最後の将軍」徳川慶喜も度々訪れました。

圭介は「人生で3回死に損なった。それは戊辰戦争で降伏したとき、日清戦争のとき、大海嘯（大津波）のとき」と語っています。

圭介は語学力やその人柄を活かして、海外で技術や産業などを学びました。そして、その知識で日本を世界中から注目される国にしました。

圭介は79才で、食道がんにより亡くなります。しかしその最期まで、日本の発展を案じていました。私たちは圭介の思いを継ぎ、日本をより良くしていかなければなりません。

圭介の銅像はどこにありますか？

A 大鳥圭介の銅像は、生誕地である兵庫県赤穂郡上郡町の役場の前に建っています。上郡の圭介生家跡には「いきいきふるさと交流館」があり、圭介について詳しく学べます。また全国各地に圭介にまつわる石碑や書、使用した碁盤など色々な物がありますので、いろいろ探してみてください。

あとがきにかえて

大鳥圭介は好奇心と自発性が人一倍あった人物だと思います。

大鳥圭介の志向はとことん実学でした。とにかく、彼は必要とされるもの、役に立つと思われるものなら、分野を問わず、なんにでも手を出しています。通常、エンジニアは、自分の分野をこれと決めたら、そこから動かないものなのですが、彼は物理・生物・化学・地質・土木・金属・機械、手に取る知識、目に入る情報、全て何にでも手を出しました。冷静に現実を見つめながらも、彼の報告書の行間は、好奇心に満ちていて、新しいモノに目を向けるわんぱく少年のようなものも垣間見えます。

圭介を通じて見てみると、「見たい」、「知りたい」、「理解したい」、面白いと感じる好奇心を育てることこそが、教育であり、人の勤勉につながると言えるのではないのでしょうか。

戦は忌避し可能な限り戦闘を回避しようとしていました。圭介は勝つ戦は、部下に任せ、負け戦ほど前に出て指揮し、自軍の損害を最小限にするよう努めたそうです。最前線で、陣羽織を弾丸で打ち抜かれ、軍が撤退する際には、圭介が盾となって、敵を食い止めたこともあったそうです。

3才年下の生まれも育ちも違う武闘派の土方歳三に好意を持ち、「一緒に次の時代を生きていきたくかったが、やっぱり近藤勇の所に行ってしまったか」と、惜しんでいました。みんなを死なせたくなかつた圭介の人柄がみてとれます。

圭介の雅号は如楓（じょふう）といいます。意味は、「かえでのごとく」あるいは「かえでのごとし」という意味です。

圭介が知っていたかどうかは分かりませんが、生誕の地、兵庫県赤穂郡上郡町の地形は、5つの谷があり楓の葉のように見えます。そのひとつが生誕地の岩木谷で、少年時代の圭介は、自然の木々を縫った谷の奥から、ほんのわずかに覗ける世界にあこがれていました。

世の中の、大きさ、奥深さ、に対して、自分の知っていることがどれほど些細で取るに足らないことか、学べば学ぶほど、それを知覚し狭い谷の幼少期の閉鎖感があったからこそ、世の中の仕組みについて感動できる素直さが育ったのでしょう。

未知なものに対してわくわくして、取り組む好奇心が、圭介のエネルギーだったと思います。